

檄を飛ばす から推理小説へ

高島俊男氏は、漢字の成り立ちから日本に渡来してきたことまで、あらゆる知識に精通しておられる、いわば漢字のプロである。三国志や水滸伝などについては、日本で一番詳しいだろうと豪語されている。年齢とともに目を悪くされたが、創作意欲は衰えない。

高島氏が嫌うのは、繰り返すが「新聞記事の檄を飛ばす」である。目の前にいる人々に檄あるいは檄文を飛ばすことなどできない。ところが、新聞は、何が気に入ったのか、プロ野球などの選手たちに「檄を飛ばす」のが好きで、各紙そろって毎朝のように掲載されている。つまり無知を毎朝知らせているようなもの。以前にも書いたが、テンガロンハットもそうで、1回使って気に入ったら、使い続ける。頭が悪いのは、記者だけではなく、誌面の形成に携わっている編集長なども同類である。耳に心地いいと思っているのだろうが、逆に耳障りである。

テンガロンハットは、ローン・レンジャーの従者のメキシカンが被っている帽子のことである。ローン・レンジャーを知らない人は、知っている人に尋ねろ。帽子に10ガロンの水が入ることから名づけられた。・・・阪神タイガースの外人選手（アメリカ人）が被っているのは、カウボーイハットである。

バカは新聞記者だけではない。テレビのアナウンサーも同じようなもので、生放送なら訂正しようがないが、編集の段階でわかるだろう？ つまり上役も知らないのである。何かと言えば、コーハイやコビチューなどである。

コーハイは高島氏が指摘した。「何が荒れ果てているのだろうか？」と思っていれば、降灰のことだった、と。このアナウンサーにかかると「灰燼に帰す」はハイジンに帰すになってしまう。コビチューも耳障りな言葉で、中国に媚びるだから「コビチュー」になる。これはネ、ビチューと読むのです。

新聞に対しても、「檄を飛ばす」は間違っている。言うなら「喝を入れる」だ。ところが、ボクは「喝を入れる」のは、自分とかすぐ近くの人に対してのものだから、ちょっとニュアンスが違うなあ、と思っていた。しかし、なかなかいい表現がでてこない。

檄あるいは檄文とは、たとえば鶴退治で有名な源三位頼政（ゲンザンミヨリマサ）が、源義朝の長男が攻めてきたことから平家側に交じって戦った。ところが世は「平家にあらずんば人にあらず」で、以仁王（モチヒトオウ）とともに平家に叛旗を翻し立ち上がったが、宇治平等院で敗れ去った。（頼政は、

摂津源氏である。つまり、北大阪から兵庫県の東端で、多田神社は、多田源氏である。) このとき、伊豆に流されていた源頼朝に、平家打倒の令旨を送った。これが「檄を飛ばす」ことである。

檄を飛ばすもテンガロンハットも、自分たちの耳に心地よく響くのだろうが、ボクには品のない、間違った表現としか言いようがない。日本語を知らない新聞屋が知ったようなことを言うな！ 馬鹿野郎！ ひょっとしたら、叱咤激励の激とまちがえたのではないか、とまで思っている。

NHKのアナウンサーもすでに書いたように物を知らない。しばらく意味がわからなかったことがある。NHK京都局からの放送で、女の子が「京都では、ろうじの古本屋さんといいます」と平板なイントネーションで喋るから、なんのことかわからなかった。話を追いかけて、随分考えてようやくわかった。「ああ、ろ**お**ぢかいな。」つまり「露地」のことだった。京都局やろ、上役もおるねやろ、NHKやから日本中に広まってしまう。……こういう変な日本語をこれ以上広めてくれるな！この無神経さで、視聴料を取ろうてののか？ 顔洗って出直して来い！

まあ、この程度の方言ひとつまともに話せないのも情けないが、事実と異なることや偏向報道をされたら、日本中が馬鹿になる。オレに採用試験をさせてくれ！ むざむざとカネを払っている人は、盗人に追い銭ですよ。

もう30年以上前になる。小学生だった子供らを連れて東北地方を旅したことがある。このとき、藤山直美ら大阪の役者さんたちが、朝の連続ドラマで大阪訛りの言葉のやりとりをしていた。ある民宿で、仲居さんが、「本当にあのドラマのような話し方をする人がいるんですネ」と、子供らの会話に驚いていた。ボクらの使う言葉は、大阪弁ではなく、単なる大阪訛り、あるいは関西訛りである。それでも京都局のオネエちゃんよりはるかにまともな言葉を使っている。本当の意味での大阪弁は、もう話す人はいないだろう。僕らより一世代も二世代も前の船場の御寮さん（ゴリョンサンですよ）くらいのもので、もう聞くことはない。その息子さんや娘さんらにその名残があるだろうか、と思っている。コイちゃん、イトはんなども、もう死語になりかけている。

最近は推理小説を読まない。30代くらいの子供らが、いくら面白いで、と勧められても、ボクにはもう推理小説を読んでいる時間がない。それよりも読まなければならない本が山ほどあるからである。そういうわけで本屋さ

んでも目をむけることもなかったのだが、柚月裕子さんのだけは、医療関係のもの以外を読んでいる。きっかけは、テレビドラマの「検事の本懐」の後半を観たことにある。この物語の原作を読みたいと思った。……「男子の本懐ぢゃ」と言ったのは、狂信的な、むしろ単なる狂人かもしれないが、暴漢に襲撃された濱口雄幸首相であるが、この人への輸血がきっかけになって（あるいは最初の輸血かもしれない）輸血が日本中に広まったらしい。そういう意味では、大変な数の患者の救済に大きな貢献をした。土佐の人で、同じ土佐の板垣退助も襲撃された。このとき「板垣死すとも、自由は死せず」と叫んだというが、じつは「痛いから早く医者を呼んでくれ」だったらしい。

ところで、小説家柚月祐子さんである。検事ものは、佐方真人シリーズで書き、刑事ものは、暴力団関係のものと、強行犯ものに分けられる。暴力団と警察の癒着が問題になった時期があるが、刑事側の視点から小説にしている。あといろんなジャンルのものを書いておられるが、将棋の棋士、臨床心理士など、主人公はさまざまである。医療関係のものは、ボクは読まないから、現在執筆中の小説は読んではいない。ボクがもっとも読んでいて楽しかったのは、四国八十八か所の巡礼を行っている元刑事と、その部下だった男との紆余曲折の内面の動きや流れを描いたもので、刑事としての使命感と正義感、人としての倫理観とのはざまに葛藤する姿を活写されている。「慈雨」という。ここ10年あまり、小説を書くのが楽しくて仕方がないのだろう、と思う。……幾度も読み返し、自分が、子供ができない夫婦の辛さを気にも留めずに口にして相手に不愉快な想いをさせていたことに気づかされ、肅然としたこともある。その中で、初めに書いた「檄を飛ばす」などといった下品な表現をすることはない。「発破をかける」が、新聞記者に理解できるだろうか？ この小説を読んでいて、人間の内面の襲まで描写するのだが、思わず「永遠のゼロ」を思いだし、該当する部分を読みかえしたほどである。

2020.10.20.

話は突然変わるが、なにせボクは、文章を書いているだけでも連想があちこちに飛ぶ。井原西鶴には足元にもおよばないが、突然結論が異なってしまうことがよくある。今がそれで、漢字の読みである。

上意下達は、ジョウイカタツとルビをふるが、僕らはジョウイゲダツだった。

白村江もハクソンコウだが、ハクスキノエではなかったか。

あといくらでもでてくるのだが、本居宣長が苦心して読んだものを、蔑ろに

するのもどうかと思う。あるとき、呑み屋で、年配の男が、多分医者かなにかだったのだろうが、突然、相殺と書いてソーサイと読む、などと講釈を垂れるから、それも間違っています。それはソーザイとよむのです、といたら、以後沈黙しよった。オレに漢字の講釈を垂れるなど、100年早いわ！
もともと医者漢字は読めない。洗滌室は「せんじょうしつ」である。
パソコンで「せんじょう」を漢字変換すると、洗滌など出てこない。洗浄である。洗滌は、せんできと読む。これを田吾作読みという。だから、現在では「洗浄室」になっている。こんな例は山ほどあるだろう。